

研究

わがふるさと、元田誌(二)

会員 市野瀬 仁

元田の地名

「<sup>モトダ</sup>元田と<sup>モトダ</sup>本田はどちらがほんたろうか、うちの拍子木には<sup>モトダ</sup>本多と書いているが——」などと、村人は疑問を持ち続けてきた。

これについていろいろ調べてみると、私は三つの資料から、住民納得のいく結果を得た。

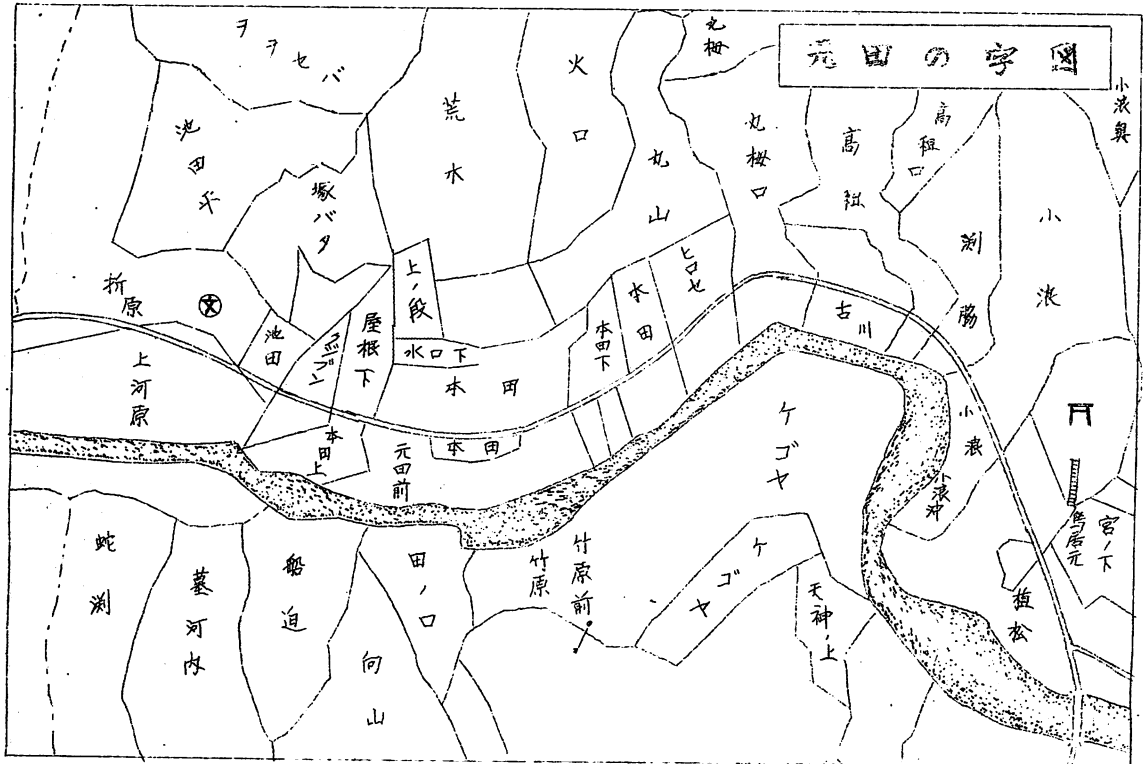
第一は、明治二十一年作製の字図(下欄)に、本田は部落の中央部の名であることが記録されている。

第二は、西音寺の過去帳に、荒木・本田・竹原・<sup>モトダ</sup>丸梅と書かれていて、本田の物故者は、部落の中央の人々の祖先であることがわしめられた。

第三は、庄屋の家であった市野瀬保考氏の古文書に、何代荒木に住むとか、何代本田に住むとか、何代丸梅に住むとか記されており、元田という字は全く見つからない。なお、市野瀬が御<sup>おん</sup>隣家から庄屋を引継ぐとまもなく、奥まった荒木から本田に出てきたことも、年代と合おせて明らかとなったのである。

それでは元田という字は、何時頃から使われ出したのだらうか。お寺の過去帳で調べてみると、

- 明治八年 妙丞 九、一七 笠原西平孫 元田
- 明治八年 猶煙 一〇、一二 河野吾佑孫 本田
- 明治九年 梅樹 一、三〇 一ノ瀬太助 元田



右のように、明治八年はじめて元田の字を見つけたことができた。そしてその後たまに出でくる程度であるが、明治三十九年になると一人を除いてすべて元田となり、本田が元田の字として定着した。おもしろいことに、まだ六十歳に満たない現在の西音寺のご院家になつて、はじめて元田・荒木と記録されていることである。古文書をたよりにして計算すると、本田が元田になるまで、ざつと三百年の年月を経たことになる。

お寺の過去帳は時のご院家が書くのであるが、地名も一般に使用されている字を書くのは、しごく当然のことである。しかし、ご院家の筆の赴くままに書くこともありうるのである。それはそれとして、本田は部落の中央の地名であつたものが、荒木・竹原・丸柵を総称して部落名に元田を使い出したのであらう。ちやうど小字尺間と大字尺間の關係と同じように考えればよいと思ふ。

それでは、本多という字もしばしば見られるが、これはどう解釈したらよいのだらうか。この質問こそ筆の赴くままに書いた例とみればよいのではなからうか。例えど、過去帳の中に、竹原を竹春、広瀬を弘瀬、備後を尾後に、植松を上松と書いてあるなど、些字を平気で書いている。こうしたことは、むしろその時代と書いた人々を想像してみて、のどかで親近感さへ覚える。ひよつとすると本田も元田にしても、モトを中心考えて、誰が使ひ出したともなく、いつのまにか使われるようになったのかもしれない。そんな軽いユーモラスにとらえることも、一つの見方であらう。

一方こう考へると、こんな見方も成立しないだらうか。

市野瀬保考氏の祖先が庄屋を譲り受けて、荒木から部落の中央に移つた。そうすれば本田という字名は、庄屋

と關係があるのではないか。時は元和八年(一六二二)といふと江戸時代初期の頃、時代の交替期に当たると。地名の交替はこういふ時期にあるものである。

地名の性格と定地の字名について

荒木は植物名、本田は耕作名、竹原は地形名、広瀬は形態名のように分類することができよう。元田部落の地名や字図にみられる定地名は、信仰とか人名とか人為的なものばかりなく、自然なものばかりである。ただ広瀬及び較的新しい名で、庄屋の資料からみると広保と出ている。市野瀬保考氏は亡祖母から、これを広保と呼んでいと聞かされてゐる。

これにはこみ入つた意味があるらしい。(詳しいことは後述する)寛延元年(一七四八)、故有つて十一代四郎兵衛は、庄屋を別家平兵衛に土地とも譲渡して、本田のはずれに住むことになる。ところが、本田の端とは言え、高台の一等地に居を構えた。この地こそ下を睥睨(へいげい)し、古きゆかりの柵竿礼城址を見るのに、格好の場所として選んだのではないか。家運は落目になつたとはいへ、往年の權威を誇示しているように見るのは、うが七すぎた見方であらうか。

近くに流れる広瀬川はほんの名のみに、川幅二倍にも満たない谷川であつて、広い瀬など見られる地形ではない。広保とは、元田には珍しい歴史のにおいのある人間的な地名であつたが、今では市野瀬の瀬の字にちなんでか広瀬となつてゐるのも、またおもしろい気がする。

(注) 前掲「元田の字図」について

(4) 字図の原図は、明治二十一年十二月に複製した。しかし昭和三十六年に土地(再評価)のため字の分布を書いたもの(従つて小字の位置)の印が現在地(當時)に入れたらう。「元田前」が書

まじまじと

④ 原園のコピトを照写するためには原状に正確・明瞭を期してつとめた。

⑤ 元田部落の宅地の字名別の現住者

今、元田部落の各宅地には次のよき何方が現住なさっているか、その字名については、こんな方が誰よりもよく知っている。

字名	住者
字丸梅口	川野 矢
丸山	狩生 一二三
広瀬	市野瀬 保考
本田下	川野 康子、市野瀬 勝喜
本田	市野瀬 善之、市野瀬 昌大
クジブン	児玉 輝喜、市野瀬 豊喜
ヤ子ノ下	市野瀬 輝喜、市野瀬 功
塚バタ	市野瀬 一、市野瀬 賢男
野添	市野瀬 信
上ノ段	市野瀬 信
荒木	元市野瀬 直喜、市野瀬 水正行

⑥ 今回ご提示の資料については、赤生所助役市野瀬 信義氏のご協力をよったもので、謝意を表します。

(この項終り)

報告

佐伯市・南海部郡八ヶ所村 全域が対象の佐伯地域文化財保存会が発足しました。

すでに大部分の会員はご存知ですが、郡市全域にある史跡もよろもろの文化財、指定のあるなしにかかわらず、滅失から保存保護をはかろうという運動です。三ヶ丸橋門保存会の後をうけて、これから文化財を守る運動に献身します。

高木会長以下役員はほとんど史談会の役員で、史談会と同一体となって活動します。

会員皆さんの近くにある文化財を、愛護しよう。ご協力下さい。お見舞いのごことありませう。すむおしらせ下さい。(事務局 市野瀬 八)

報告

第十七回九州地区民俗芸能大会に出場して

黒沢・富尾神社神踊・杖踊保存会

山崎 作

この度皆様のご支援によりまして、当青山黒沢部落に四百年の昔からつたある、富尾神社に奉納している神踊と杖踊を、民俗芸能の大分県代表として、九州民俗芸能佐賀大会に出場することになりました。そこで保存会は盆後からしばしば練習を重ね、出場一か月前からはよく猛練習をいたしました。

大会は十月五日とときまり、私共の所は稽の取入れがちょうど重なり、しかまこの秋は雨が多く、まことに困った時期でありましたが、多田太郎吉会長以下全員二十四名一体となり、一人の欠員もなく元気に出場できました。ことは、まことによるこばしい次第でございます。

十月三日、前夜祭として青山小学校の講堂で、新調の装束をつけて最後の練習を行ない、広く村の方々に公開し、皆様の拍手をおびました。

翌四日朝七時、部落の方々多数の見送りを受け、総員二十四名、元氣よく佐賀県武雄市に向って出発致しました。途中無事、午後二時に武雄市に到着、先ず指定旅館に入り、しばらく休養をとり、午後四時会場の文化会館に行きました。この会館は今年の新築で、佐伯の文化会館よりずっと大きく、敷地面積は佐伯の三倍ぐらい、中にはいつて見ますと、舞台をはじめ各果の控室など雄大なものです。私共は控室でリハーサルの時間を待ちました。午後四時半から、本舞台で練習で、いくらかとまどうかと思いましたが、全員多田会長の指示にしがたかって